

内田魯庵

鷗外博士の追憶



# 鷗外博士の追憶



若い蘇峰そほうの『国民之友』が思想壇の檜舞台ひのきぶたいとして今の『中央公論』や『改造』よりも重視された頃、春秋二李の特別附録は当時の大家の顔見世かおみせ狂言として盛んに評判されたもんだ。その第一回は美妙の裸蝴蝶で大分前受けがしたが、第二回の『於母影おもかげ』は珠玉を満盛した和歌漢詩新体韻文の聚宝盆しゅうほうぼんで、口先きの変わった、丁度果実くだものの盛籠もりかごを見るような色彩美と清新味で人気を沸騰さした。S・S・Sとは如何いかなる人だろう、と、未知の署名

者の謎がいよいよ読者の好奇心を惹起じやつきした。暫らくしてS・S・Sというは一人の名でなくて、赤門の若い才人の盟社たる新声社の羅馬字綴りの冠字で、軍医森林太郎が頭目であると知られた。

鷗外は早熟であつた。当時の文壇の唯一舞台であつた『読売新聞』の投書欄に「蛙の説」というを寄稿したのはマダ東校（今の医科大学）に入学したばかりであつた。当時の大学は草創時代で、今の中学卒業程度のものを収容した。殊ことに鷗外は早熟で、年齢を早めて入学したからマダ全くの少年だつた。が、少年の筆らしくない該博の

識見に驚嘆した読売の編輯局へんしゆうは必ずや世に聞ゆる知名の学者の覆面か、あるいは隠れたる篤学であろうと想像し、敬意を表しかたがた今後の寄書をも仰ぐべく特に社員を鷗外の仮寓かぐうに伺候せしめた。ところが社員は恐る恐る刺しを通じて早速部屋に通され、肅々如として恭うやうやく控えてると、やがてチヨコチヨコと現われたは少くも口髯はぐらい生はやしてる相当年配の紳士と思いの外なる極めて無邪気な紅顔こうがんの美少年で、「私が森です」と挨拶された時は読売記者は呆気あつけに取られて、暫らくは開あいた口が塞ふさがらなかつたという逸事がある。(この咄は桜木町時

代に鷗外自身の口から直接に聴いたのである。）

鷗外は幼時神童といわれたそうだ。虚実<sup>きょじつ</sup>は知らぬが、「十ウで神童、ハタチで才子、二十以上はタダの人とうお約束通り、森の子も行末はタダの人サ、」と郷人の蔭口<sup>かげぐち</sup>するのを洩<sup>も</sup>れ聞いて発憤<sup>はつぷん</sup>して益々<sup>ますます</sup>力学したという説がある。左<sup>ひだり</sup>に右<sup>みぎ</sup>く天稟<sup>うまれつき</sup>の才能に加えて力学衆に超<sup>こ</sup>え、早くから頭角を出した。万延元年の生れというは大学に入る時の年齢が足りないために戸籍を作り更<sup>か</sup>えたので実は文久二年であるそうだ。「蛙の説」を『読売』へ寄書したのは大学在学時代で、それから以来も折々新聞に投



書したというから、一部には既に名を認められていたろうが、あまね 洽く世間に知られたのは『国民之友』のS・S  
 ・Sからである。

S・S・Sの名が世間を騒がした翌あくる年、タシカ明治二十三年の桜の花の散った頃だった。谷中やなかから上野を抜けて東照宮の下へ差掛さしかかった夕暮、偶ふつと森林太郎という人の家はこの辺だナと思って、何心なにごころとなく花園町を軒けん別門札べつもんざつを見て歩くと忽たちまち見附けた。出来心で名刺を通じて案内を請うと、暫らくして夫人らしい方が出て来られて、「ドウいう御用ですか？」

何しろ社交上の礼儀も何も弁わきまえない駈かけ出しの書生ツ  
ぽで、ドンナ名士でも突然訪問して面会出来るものと思  
い、また訪問者には面会するのが当然で、謝絶するナゾ  
とは以ての外の無礼と考えていたから、何の用かと訊きか  
れてムツとした。

「何の用事ありませんが、そんなら立派な人の紹介  
状でも貰って上りましょう、」とブツキラ棒に答えてツ  
ウと歸った。

その頃私は神田小川町に下宿していた。忌々いまいましくてな  
らないので、歸ると直ぐ「鷗外を訪うて会わず」という

短文を書いて、その頃在籍していた国民新聞社へ宛てて  
ポストへ入れに運動かたがた自分で持って出掛けた。で、  
直ぐ近所のポストへ投<sup>ほう</sup>り込んでからソコラを散歩してか  
れこれ三十分ばかりして帰ると、机の上に「森林太郎」  
という名刺があつた。ハツと思つて女中を呼んで聞くと、  
ツイたつた今おいでになつて、先刻は失礼した、宜<sup>よろ</sup>しく  
いつてくれというお言い置きで御座いますと云つた。

考えるとコツチはマダ無名の青年で、突然紹介状もな  
しに訪問したのだから一応用事を尋ねられるのが当然で  
あるのに、さも侮辱されたように感じて向<sup>むか</sup>ツ腹<sup>はら</sup>を立てた。

然るに先方は既に一家を成した大家であるに、ワザワザ遠方を夜更ふけてから、（丁度十時半頃であつた、）挨拶に来られたというは礼を尽した仕方で、誠に痛み入つて窃ひそかに赤面した。

早速社へ宛てて、今送つた原稿の掲載中止を葉書で書き送つてその晩は寝ると、翌る朝の九時頃には鷗外からの手紙が届いた。時間から計ると、前夜私の下宿へ来られて帰ると直ぐ認したためて投郵したらしいので、（この頃の郵便はこう早くは届かないが、その頃は今よりも迅速だつた。）文面は記憶していないが、その意味は、私の

ペン・ネームは知っていても本名は知らなかった。失礼した、アトで偶ふつと気がついて取敢とりあえずお詫びに上ったがお留守で残念をした、ドウカ悪く思わないで復また遊びに来てくれという、慇懃いんぎんな、但し率直したしな親みのある手紙だった。

折返して直ぐ返事を出し、それから五、六日して或る夕刻、再び花園町を訪問した。すると生憎あいにく運動に出られたというので、仕方がなしに門を出ようとする、入れ違いに門を入ろうとして帰り掛ける私を見て、垣に寄添ちゆうちよって躊躇ちゆうちよしている着流しの二人連れがあった。一人は

デップリした下脹しもぶくれの紳士で、一人はゲツソリ頬のこけた学生風であつた。容よう子すがドウモ来客らしくないので、もしやと思つて、佇たちどま立つて「森さんですか、」と声を掛けると、紳士は帽子に手を掛けつつ、「森ですが、君は？」

「内田です、」というのと、

「そうか、」と立ちながら足を叩たたいて頹くずれるように笑つた。「宜よかつた、宜よかつた、最も少すこし遅れようもんなら復た怒られる処だつた。さあ、来給え、」と先きへ立つて直ぐ二階の書齋へ案内した。「こないだは失敬した。君の名を知らんもんだからね、どんな容き子の人だと訊きく

と、鞆かばんを持ってゐる若い人だといふので、（取次とりつぎがその頃私が始終提さげていた革の合切袋がっさいぶくろを鞆と間違えたと思える。）テツキリ寄附金勧誘と感違あやまいして、何の用事かと訊かしたんだ。ところが、そんなら立派な人の紹介状を持って来ようとツウと歸つたといふのが如何にも皮肉なので、誰か知らんと色々考うえてる中うちに偶ふつと浮うんだのは君だ。ドウモ君らしい。コイツ失しま敗まつたと、直ぐ詫わびに君の許もとへ出掛けると今度は君が留守でボンヤリ歸つたようなわけさ。イヤ失敬した、失敬した……」と初めから砕けて一見旧知の如くであつた。

その晩はドンナ話をしたか忘れてしまったが、十時頃まで話し込んだ。学生風なのはその頃マダ在学中の三木竹二たけじで、兄弟して款待されたが、三木君は余り口を開かなかつた。

鷗外はドチラかというところクロース・ハアテツドで、或る限界まで行くとそれから先きは厳として人を容いれないという風があつた。が、官僚気質かたぎの極めて偏屈な人で、容易に人を近づけないで門前払いを喰わすを何とも思わないように噂する人があるが、それは鷗外の一面しか知



らない説で、極めてオオポンな、誰に対しても城府を撤して奥底もなく打解ける半面をも持っていたのは私の初対面でも解る。若い人が常に眷なついて集まったので推しても、一部に噂されるような偏屈きようあひな狭隘きようあひな人でなかったのは明白である。

だが、極めて神経質で、学徳をも人格をも累するに足らない些事さじでも決して看過くわんこしなかつた。十数年こつち以往文壇と遠ざかってからは較やや無関心になつたが、『しがらみ草紙』や『めざまし草』で盛んに弁難論争した頃は、六号活字の一行二行の道聴塗説をさえも決して看過しない

で堂々と論駁ろんぱくもするし弁明べんめいもした。

それにつき鷗外の性格の一面を窺うかがうに足る一挿話がある。或る年の『国民新聞』に文壇逸話と題した文壇の楽屋咄ばなしが毎日連載されてかなりな呼物よびものとなった事があった。蒙求風もうぎゆうに類似の逸話を対聯つうれんしたので、或る日の逸話に鷗外と私と二人を列ならべて、堅忍不拔精力人に絶すと同じ文句で並称した後に、但ただ異なるは前者の口舌の較やや蹇澁けんじゆうなるに反して後者は座談に長じ云々と、看方みかたに由れば多少鷗外を貶けなして私を揚げるような筆法を弄ろうした。この逸話の載った当日の新聞を読んだ時、誰が書い

たか知らぬがツマラヌ事を書いたもんだと窃に鷗外の誤解を恐れた。果<sup>はた</sup>せる哉、鷗外は必定<sup>てつきり</sup>私が自己吹聴のため、ことさらに他人の短と自家の長とを対比して書いたものと推断して、怫<sup>む</sup>然<sup>つ</sup>としたものと見える。

その次の『柵<sup>しがらみぞうし</sup>草紙』を見ると、イヤ書いた、書いた、僅か数行に足りない逸話の一節に対して百行以上の大反駁を加えた。要旨を搔<sup>かいつま</sup>摘<sup>ま</sup>むと、およそ弁論の雄というは無用の饒<sup>じょうぜつ</sup>舌<sup>ぜつ</sup>を弄<sup>い</sup>ずる謂<sup>い</sup>ではない、鷗外は無用の雑談冗弁をこそ好まないが、かつてザクセンの建築学会で日本家屋論を講演した事がある、邦人にして独<sup>ドイツ</sup>逸語を以て独

逸人の前で演説したのは余を以て嚆矢こうしとすというような  
ろんぼう論鋒で、一々『国民新聞』所載の文章を引いては、この  
 処筆者の風丰彷彿ふうぼうほうふつとして見はるとたたみか畳掛けて、暗に私に諷あ  
 てつけて散三さんざに当り散らした。ところが、この文壇逸話  
 の筆者は私でなくて山田美妙であつたのだ。私は昔から  
 人の反駁などは余り氣に掛けない方で、大抵は雲煙過眼  
 してしまふし、鷗外の氣質はおおよそ吞込のみこんでるから、  
 威丈高いたけだかに何をいおうと格別氣にも留めなかつたが、誰だ  
 か鷗外に注意したものがあつたと見えて、その後偶然フ  
 ラリと鷗外を尋ねると、私の顔を見るなり、「イヤ失敬

した、失敬した、アレは美妙が書いたんだってね、君か  
と思ったのでツイ失敬した、まあ勘弁してくれたまえ、  
と気の毒そうにいった。鷗外は向腹むかつぱらを立てる事も早い  
が、悪いと思うと直ぐ詫まる人だった。

鷗外は人に会うのが嫌いよで能く玄関よ払いを喰わしたと  
いう噂がある。晩年の鷗外とは疎縁であったから知らな  
いが、若い頃の鷗外はむしろ客の来るのを喜んで、鷗外  
の書齋はイツモお客で賑にぎわった。

私が最も頻繁に訪問したのは花園町から太田の原の千  
駄木時代であった。イツデモ大抵夜るだった。随分十時

過ぎから出掛けた事もあつた。或る晩、大分夜が更けたらしく思つたので、丁度茶を持って来た少婢に向つて、「何時になります？」と訊きくと、少婢は眠ねそうな眼をしつつ、「モウ十二時で御座います、」といつた。

すると鷗外は大喝して、「モウ十二時とは何だ、マダ十二時とナゼいわん、」と叱しかりつけた。私は氣の毒になつて徐おもむろに起ち掛けようとすると、「マダ早いよ、僕の処は夜るが昼だからね。眠ねくなつたらソコの押入から夜具ひきずりを引摺出してゴロ寝ねをするさ。賀か古こなぞは十二時が打たんけりや来ないよ、」といつた。

賀古翁は鷗外とは竹馬の友で、葬儀の時に委員長となつた特別の間柄だから格別だが、なるほど十二時を打つてからノソノソやつて来られたのに数回邂逅であつた。

こんな塩梅あんばいで、その頃鷗外の処へ出掛けたのは大抵九時から十時、帰るのは早くて一時、随分二時三時の真夜中に帰る事も珍らしくなかつた。私ばかりじゃなかつた、昼は役所へ出勤する人だつたからでもあろうか、鷗外の訪客は大抵夜るで、夜るの千朶山房せんだは品詩論画の盛んなる弁難に更けて行つた。

鷗外は睡眠時間の極めて少ない人で、五十年來の親友の賀古翁の咄はなしでも四時間以上寝た事はないそうだ。少年時代からの親交であつて度々鷗外たびたびの家に泊つた事のあつた某氏の咄でも、イツ寝るのかイツ起きるのか解らなかつたそうだ。

鷗外の花園町の家の傍に私の知人が住んでいて、自分の書齋と相面する鷗外の書齋の裏窓に射さす燈火あかりの消えるまで競争して勉強するツモリで毎晩夜を更かした。が、どうしてもそれまで起きていられないので燈火の消える時刻を突留める事が出来なかつた。或る晩、深夜に偶ふと



眼が覚めて寝つかれないので、何心なく窓をあけて見ると、鷗外の書斎の裏窓はまだポツカリと明るかった。「先生マダ起きているな、」と眺めていると、その中にプツと消えた。急いで時計を見るとあけがた払曉の四時だった。「これじゃアとても競争が出来ない、」とその後私の許へ来て話した。

尤も二時三時まで話し込むお客が少くなかったのだから、書斎のアカリの消えるのがしらしら白々明けであるのは不思議でない。「人間は二時間寝ればナポレオン沢山だ、」という言葉は度々鷗外から聞いた。「那破烈翁は四時間しか寝なか

ったそうだが、四時間寝るのを豪えらがる事はないさ、」と平気な顔をして、明け方トロトロと眠ると直ぐ眼を覚まして、定刻に出勤して少しも寝不足な容子を見せなかつたそうだ。

鷗外は甘藷さつまいもと筍たけのこが好物だったそうだ。肉食家というよりは菜食党だった。「野菜料理は日本が世界一である。欧羅巴ヨーロッパの野菜料理てのは鶯うぐいすのスリ餌えのようなものばかりだから、「ヴェジテラニヤン・クラブ」へ出入する奴やつは皆青瓢箪あおびようたんのような面つらをしている。が、日本では

菜食党の坊主は皆血色のイイ健康な面をしている。日本の野菜料理が衛養に富んでるのは何よりこれが第一の証拠だ、」というのが鷗外の持論であった。

「牛や象を見たまえ、皆菜食党だ。体格からいったら獅子や虎よりも優秀だ。肉食でなければ營養が取れないナゾというのは愚論だよ。」

が、鷗外は非麦飯主義で、消化がイイという事は衛養分が少ないという事だという理由から固く米飯説を主張し、米の營養は肉以上だといっていた。

或る時、その頃私は痩せていたので、ドウしたら肥ふとる

だろうと訊きくと、

「それは容易わけない事だ。毎日一度大飯を喰って、日比谷の原（その頃はマダ公園でなかった）を早足で三遍も廻れば直じき肥る。それには牛肉で飯を喰うのが一番だ。肉が營養があるというわけではないので、食慾を刺戟しげきするのは肉が一番だから、肉で喰うのが一番飯が余計喰える。」と大食と食後の早足運動を力説した。

鷗外の日本食論、日本家屋論は有名なものだ。イツだっけか忘れたが、この頃は馬鹿に忙がしいというから、何が忙がしいかと訊くと、毎日々々壁土の分析ばかりし

ているといった。この研究が即ち日本家屋論の一部であった。この日本食論と日本家屋論の或るものは独逸文で書かれて独逸の学界で発表されたから日本よりは独逸で有名である。

独逸といえ、或る時鷗外を尋ねると、近頃非常に忙がしいという。何で忙がしいかと訊くと、或る科学上の問題で北尾次郎と論争しているんで、その下調べに骨が折れるといった。その頃の日本の雑誌は専門のものも目次ぐらいは一と通り目を通していたが、鷗外と北尾氏との論争はドノ雑誌でも見なかったので、ドコの雑誌で発

表しているかと訊くと、独逸の何とかいう学会の雑誌（今はその名を忘れた）でだといった。日本人同士が独逸の雑誌で論難するというのは如何にも世界的で、これを以ても鷗外が論難好きで、シカモその志が決して区々日本の学界や文壇の小蝸殻しやうかかくに跼蹐きよくせきしなかつたのが証される。

鷗外の博覧強記は誰も知らぬものはないが、學術書だろうが、通俗書だろうが、手当り任せに極めて多方面わたに涉わたって集めもし読みもした。或る時尋ねると、極細ごくほそい真書しんかきで精々せつせと写し物ものをしているので、何を写しているかと

訊くと、その頃地学雑誌に連掲中の「鉱物字彙」であつた。ソナナものを写すのは馬鹿馬鹿しい、近日丸善から出版されるといふと、そうか、イイ事を聞いた、無駄骨折をせずとも済んだといつた。(それから一と月ほどして出版されたのを寄送すると、大遍喜んだ礼状をよこした。)

その時、そんなものを写してドウすると訊くと、「何かの時には役に立つさ、」といつた。「何でも書物は一生の中に一度役に立てばそれで沢山だ。そういう意味で学術的に貴いものなら何でも集めて置く、」と書棚の中

から気象学会や地震学会の報告書を出して見せた。こういうものまでも一と通りは眼を通さなければ気が済まなかつたらしい。が、権威的の學術書なら別段不思議はないが、或る時俗謡か何かの咄が出た時、書庫から『魯文珍報』や『親釜集』の合本を出して見せた。『魯文珍報』は黎明期れいめいの雑誌文学中、較やや特色があるからマダシモだが、『親釜集』が保存されてるに到つては驚いてしまった。

一と頃江戸凶や武鑑を集めていた事があつた。本郷の永盛の店頭よに軍服姿の鷗外を能く見掛けるという噂を聞



いた事もある。その頃偶ふつと或る会で落合おちあった時、あたかも私が手に入れた貞享じょうきょうの江戸図の咄はなをすると、そんな珍本は集めないよ、僕のは安い本ばかりだと、暗に珍本無用論を臭におわした。が、その口の端はたから渋江しぶえ抽斎ちゆうさいの写した古い武鑑（？）が手に入ったといつて歓喜と得意の色を漲たからした。

鷗外が抽斎や蘭軒らんけん等の事跡を考証したのはこれらの古書校勘家と一縷いちるの相通あ通うずる共通の趣味があつたからだろう。晩年一部の好書家が掖斎えきさい展覧会を催したらドウだろうと鷗外に提議したところが、鷗外は大賛成で、博物館

の一部を貸してもイイという咄があった。鷗外の賛成を得て話は着々進行しそうであつたが、好書家ナンテものは蒐集には極めて熱心であつても、展覧会ナゾは気紛れに思立つても皆ブシヨウだからその計画も抄取はかどらないでとうとう実現されなかつた。(この咄については『明星』掲載当時或る知人から誤解であると手柬しゅかんして訂正されたが、これもまた鷗外自身の口から聴いたのだから、鷗外の思違いかも知れぬが取消さずに置く。)

若い人たちの中には鷗外が晩年考証に没頭して純文芸

に遠ざかったのを惜おしんで、鷗外を追懐するにつけて再び文芸に帰る期が失われたのを遺憾とするものがあつた。

が、私の思うままを有ありてい体にいうと、純文芸は鷗外の本領ではない。劇作家または小説家としては縦たとい令第二流を下らないでも第一流の巨匠でなかつた事を肯あえて直言する。何事にも率先して立派なお手本を見せてくれた開拓者ではあつたが、決して大成した作家ではなかつた。

が、考証はマダ僅わずかに足を踏掛ふみかけたばかりであつても、その博覧癖と穿鑿せんさく癖とが他日の大成を十分約束するに足るものがあつた。『帝諡考ていしこう』の如き立派な大著を貢献さ

れたのは鷗外の偉大な業績の一つである。考証家の極めて少ない、また考証の極めて幼稚な日本の学界は鷗外の巨腕に待つものが頗る多かつた。すこぶ鷗外が董督とうとくした改訂六国史りつこくしの大成を見ないで逝いつたのは鷗外の心残りでもあつたろうし、また學術上の恨事でもあつた。

鷗外が博物館総長の椅子に坐るや、世間には新館長が積弊を打破して大改革をするという風説があつた。丁度その頃、或る処で鷗外に会つた時、それとなく噂の真否を尋ねると、なかなかソナわけには行かないよ、傍観

者は直ぐ何でも改革出来るように思うが、責任の位置に坐って見ると物置一つだつて歴史があるから容易に打壊ぶちこわす事は出来ない、改革に焦あせつたなら一日だつて勤めていられるもんじやないといった。

だが、鷗外時代になってから目に見えない改革が実現された。陳列換えは前総長時代からの予かねての計画で、鷗外の発案ではなかつたともいうし、刮目かつもくすべきほどの入換えでもなかつたが、左とに右かく鷗外が就任すると即時に断行された。研究報告書は経費の都合上十分抱負が実現されなかつたが、とにかく鷗外時代となって博物館から

報告書が発行されるようになったのは日本の博物館の一  
進歩である。鷗外は各国博物館の業績に深く潜思して、  
就任後一、二回落合った偶然の咄のついでにも抱負の一  
端を洩<sup>も</sup>らしていた。もし長くその椅子に坐していたら必  
ず新生面を拓<sup>ひら</sup>く種々の胸算<sup>むなざん</sup>があつたろうと思う。正倉院  
の門戸を解放して民間篤志家の拝観を許されるようにな  
ったのもまた鷗外の尽力であつた。この貴重な秘庫を民  
間奇特者に解放した一事だけでも鷗外のような学術的芸  
術的理解の深い官界の権勢者を失つたのは芸苑の恨事で  
あつた。

鷗外は早くから筆蹟が見事だった。晩年には益々ますます老熟して蒼勁精嚴そうけいを極めた。それにもかかわらず容易に揮毫きごうの求めに応じなかった。殊ことに短冊へ書くのが大嫌いで、日夕親炙しんしやしたものの求めにさえ短冊の揮毫は固く拒絶した。何でも短冊は僅か五、六枚ぐらいしか書かなかつたろうという評判で、短冊蒐集家の中には鷗外の短冊を懸賞したものもあるが獲えられなかった。

日露戦役後、度々部下の戦死者のため墓碑の篆額てんがくを書かせられたので篆書は堂に入った。本人も得意であつて

「篆書だけは稽古したから大分上手になった、」と自任していた。私は今人の筆蹟なぞに特別の興味を持つてゐるのではないが、数年前に知人の筆蹟を集めて屏風を作ろうと思立つた時、偶然或る処で鷗外に会つたので一枚書いてくれというと、また冷かしの種にするんだらうと笑つて応じてくれそうもなかつた。「そんな事をいわずに墓碑の篆額を書くツモリで書いてくれ」と重ねてというと、「墓碑なら書くよ、生きてる中はけんのん陰呑だから書かんが、死んだら君の墓石へ書いてやろう、」と云つた。

「調じょうだん戯じゃない。君と僕とドツチが先きへ死ぬか、



年からいったって解るじやないか。」

「そりやア解ってるさ。君のようにむやみと薬を飲むカラダじやないからね。年なんかアテにならん。僕がアトへ残るのは知れ切ってる。こりやあマジメだよ、君が死ねばきつと墓石へ書いてやる。森に墓銘を書かせると遺言状に書いて置いててもイイ、」と真顔まがおになっなっていった。

一度冠かんむりを曲まげたら容易うちきりに直す人でないのを知ってるからその咄うちきりはそれ切り打切うちきりとした。が、万一自分が鷗外おんがいに先んじたらこの一場の約束の実現を遺言するはずだったが、鷗外おんがいが死んでしまったのでその希望も空むなしくなっ

た。これは数年前、故和田雲邨翁うんそんが新収稀覯書きこうしよの展覽を兼ねて少数知人を招宴した時の食卓での対談であつた。これが鷗外と款語した最後で、それから後は懸違かけちがつて一度も会わなかつたから、この一場の偶談は殊に感慨が深い。

私が鷗外と最も親しくしたのは小倉赴任前の古い時代であつた。近時は鷗外（のみならず他の文壇の友人）とも疎縁となつて、折々の会合で同席する位に過ぎなかつたが、それでも憶出おもいだせば限りない追懐がある。平生往来

しない仲でも、僅か二年か三年に一遍ぐらいしか会わないでも、昔し親しくした間柄は面と対<sup>むか</sup>った時にいい知れないなつかしさがあつた。滅多に会わないでも永い別れとなると淋しい感がある。

殊に鷗外の如き一人で数人前の仕事をしてなお余りある精力を示した人豪は、一日でも長く生き延びさせるだけ学界の慶福であつた。六十三という条、実はマダ還暦で、永眠する数日前までも頭脳は明晰で、息の通う間は一歩でも余計に書残したいというほど元気旺勃<sup>おうぼつ</sup>としていた精力家の易筮<sup>えきさく</sup>は希望に輝く青年の死を哀<sup>かな</sup>しむと同様な

限りない恨事である。

（大正十一年七月十六日記、翌月『明星』掲載、  
大正十三年十月補筆）





日本文学電子図書館

---

鷗外博士の追憶

著 者：内田魯庵

制作者：宮澤一郎

底 本：「新編 思い出す人々」  
岩波文庫、岩波書店

1994年2月16日 第1刷発行

---

日本文学電子図書館